

## 【資 料】

# ハリオアマツバメ (*Hirundapus caudacutus*) の巣内ヒナ 救護時に見出されたハジラミ類

鈴木 夏海<sup>1)</sup> 高木 龍太<sup>1)</sup> 森 さやか<sup>2)</sup> 浅川 満彦<sup>3)</sup>

1) 酪農学園大学獣医学群獣医学類

2) 酪農学園大学農食環境学群環境共生学類

3) 酪農学園大学獣医学群獣医保健看護学類

2019年8月末、北海道十勝地方某所にて、衰弱したハリオアマツバメ (*Hirundapus caudacutus*) 巣内ヒナ2羽が救護され、酪農学園大学野生動物医学センターに収容された (同センター登録番号As17580および17581; 図1)。その後、これら両個体は、無事、放鳥されたが、ケアの際に、両個体頭部にそれぞれ20個体を超す外部寄生虫が目視確認された (図2上段左)。そこで、幼鳥の状態に影響を与えないように保定し、7つの虫体 (後述) と羽毛に着いた卵 (図2下段) を採集し、70%エタノールで固定・保存した。これらを光学顕微鏡下で観察し、各部位をエリアカーブメータ (X-Plan 380dⅢ: 牛方商会、神奈川) を用い測定した。

その結果、得られた虫体はハジラミ類で、雄3虫体および雌4虫体であった。雌雄とも体長3.8 mm、頭部 (長さ×幅; 以下同様) 0.6 mm×1.0 mm、胸部0.9 mm×0.6 mm、腹部2.4 mm×1.5 mm、体各部の剛毛の長さは腹部側方で0.6 mm~1.1 mm、腹部背側で0.9 mm、尾端で1.6 mmであった。雌雄生殖器の特徴はそれぞれ、

図2上段中央あるいは同右を参照されたい。虫卵は羽軸に付着し、幼虫を包含した虫卵サイズは120 μm×48 μmであった (図2下段左)。

以上の形態概観はMenoponidae科のハジラミ類で、Palma<sup>[1]</sup>が定義した *Dennyus* 属 *Takamatsuia* 亜属と一致した。このカタログ<sup>[1]</sup>で参照されたニュージーランド産ハリオアマツバメから得られた虫体が若虫ニンプであったため、種名は保留されていた。なお、ハリオアマツバメは日本には夏鳥として飛来し、おもな越冬地はニューギニアからオーストラリア東部とされている。よって、Palma<sup>[1]</sup>のニュージーランドにおける発見事例は偶発的事象であったかもしれない。ところで、その記載<sup>[1]</sup>中に重要参照種として、*D. (T.) major* が紹介され



図1. 酪農学園大学野生動物医学センターに収容されたハリオアマツバメのヒナが飼育用ダンボール箱壁面に取り付けられた金網に懸垂して休息する様子 (左) と腹部検査の様子 (右)

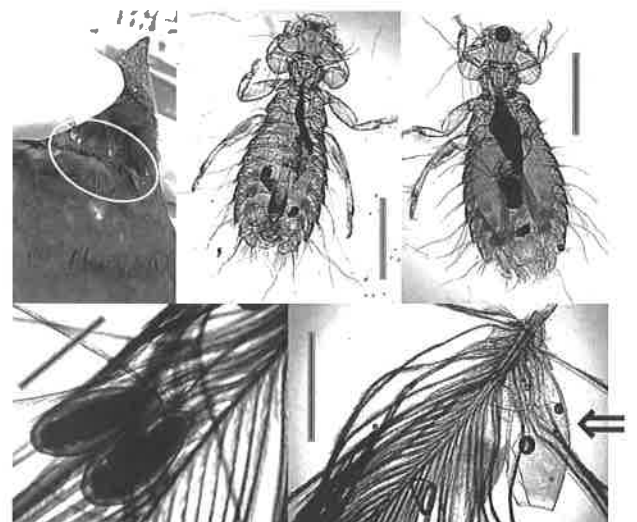


図2. 酪農学園大学野生動物医学センターに収容されたハリオアマツバメ巣内ヒナ頭部に認められた *Dennyus* (*Takamatsuia*) *major* と考えられる種の寄生状況 (上段左精円内白点)、同虫体雄 (同中央)・雌 (同右) の拡大像、および虫卵 (下段左) と幼虫孵化後の卵殻 (同右; 矢印)。図中のスケールはいずれも1 mm

ていたが、宿主特異性が高いというハジラミ類一般の属性を鑑みた場合、今回の標本もこの種である蓋然性は極めて高い。*D. (T.) major* は、1926年、日本産ハリオアマツバメに認められた標本について記載されたものである[2]。もし、今回の種がこの種であった場合、90年以上の期間を経て、2番目の記録となる。

頭部に虫体・卵が多く確認されたのは、自身の嘴による除去が不可能なことで、もし、親鳥の加護があれば親により除去されたものであろう。鳥類に寄生するハジラミ類は小羽枝を中心に摂食するので、濃厚寄生では羽毛へのダメージは必至である。よって、今回のように可能

な限り除去するのも健康維持のために必要な措置であったと判断した。

### 引用文献

- [1] Palma RL : A catalogue of parasitic lice from New Zealand, Fauna of New Zealand, No. 76, Phthiraptera (Insecta), 400, Museum of New Zealand, Auckland, New Zealand (2017)
- [2] Uchida S : Studies on amblycerous Mallophaga of Japan, J Coll Agr Tokyo, 9, 1-56 (1926)